

たぐみ

Craftsmanship

特集 倉敷堤窯 武内真木作陶展

第11号

誇り高きイラク・アフガンの民

イラクで人質となっていた五人の日本人が無事解放された。この事件に関する膨大な報道にもかかわらず、私たちは必ずしも現地の事情と人々の心情について正確な情報を得た訳ではない。

西アジアに限らないが、民族や部族、あるいはイスラム教の宗派の違いは、近代における欧米列強の干渉や植民地化もあって、彼の地の人たちに近代的な意味での統一国家意識の成熟を妨げてきたのであった。

アフガニスタンも、パキスタンと同種のパシュトゥン人をはじめ、ウズベキスタン、トルクメン、ハザラ人など各民族が東西南北、高地、低地を住み分けて、それほど大きな争いもなく合議、共生の社会を築いてきた。

それが十九世紀に入ってからほぼ百年の間、イギリスの三次にわたる大侵攻によって、アフガン王国の独立は風前の灯となり、またオスマントルコの

支配から脱したイラクは、イギリスの巧妙な策略によって再び被植民地への道をたどりつつあった。

そういったなかアフガンは、パキスタンとの国境のカイバル峠での激戦でイギリス植民地軍を壊滅させ、一九一九年遂に国家として国際的に承認される。この年まさにロシア革命と第一次大戦の直後、中国の五・四運動、朝鮮の三一独立運動、ガンジーの非暴力抵抗運動の発端となった年であった。

イラクは人類文明発祥の地、アフガンもまた東西文明交流の要衝であって、人々は誇り高く他人の侮辱を決して許さない。一見ばらばらでも、自らの尊厳を守るためには一致結束をする。

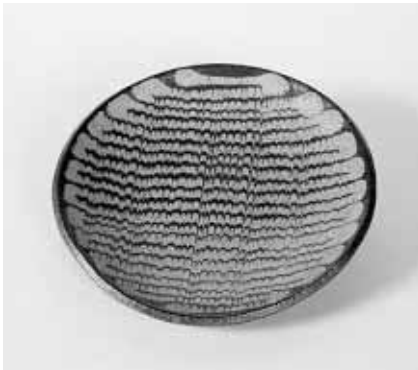
第二次大戦において大義なき同盟を拒み、完全中立を貫いた国は、アフガン、アイルランド、アルゼンチンの三ヶ国であった。それは列強の圧力や利害得失の選択からではなく、国民国家としての誇りと道理を重んじたからに他ならない。イラクも今その生みの苦しみにあるのだと思う。(志賀直邦)



スリップウェア 直径 30 cm



スリップウェア 直径 15 cm



スリップウェア 直径 22.5 cm



スリップウェア 直径 23 cm

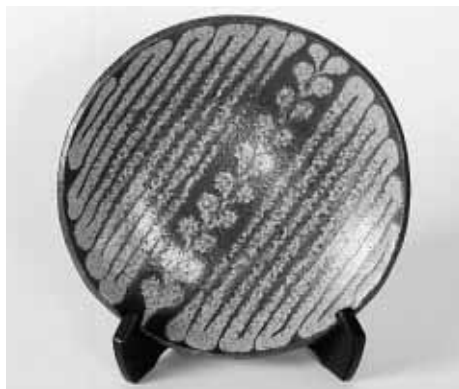
たくみ企画展
倉敷堤窯 武内真木作陶展

会 期 平成十六年六月五日（土）～十二日（土）
六月六日（日）は営業いたしません。
会 場 銀座たくみ 二階ギャラリー
営業時間 十一時から十九時まで
六日（日）と十二日（土）は十七時三十分まで

スリップウェアとわたし

武内真木

昨年、大阪で開かれた「英国の古陶『スリップウェアの美』展」を拝見し、その数の多さに圧倒されました。以前から写真で見て、どのようにして作ったのか分からなかった物があつたのですが、それらと同じ物が幾つか見つ



スリップウェア 直径 28.5 cm

り、想像していた作り方に確信が持て、また色々勉強になりました。しかし、技術的な疑問が解決した嬉しさ以上に、描かれている素材で力強いスリップ模様我感到しました。さらに長い年月繰り返し作り続けられた仕事の持つ力の確かさを改めて認識しました。

わたしのスリップウェアとの出会いは、英国のそれではなく、父・晴二郎のスリップウェアでした。「自分は英国のスリップウェアを再現するのではなく、スリップという技法を使って自分なりの物を作りたい」と思っていたのですが、あの素材で力強くのびやかなスリップの模様を見ると自分の描く線はまだまだと気付き、大阪日本民芸館からの帰り道は思いに沈んだものでした。

今、わたしは英国のスリップウェアのパターンも積極的に描いています。それは再現というのではなく、単純に真似てみようと思つたからです。職人が一日に何枚も何枚も繰り返し描いた仕事ですから、たいして近づけるとは思いませんが、この繰り返し先に自分のスリップ模様があるような気がしています。

わたしのスリップウェアの作り方は、まず粘土の板を鉢の型に合わせて切ります。次に切った板の縁を作ります。そして鉢の縁のでき上がった粘土の板に黒化粧土を流し、すぐ白化粧土でスリップ模様を描きます。このスリップ模様を描く道具は自分で色々工夫して作っています。季節によりですが、だいたい翌日に石膏で作った凹型に埋め、形を作ります。この時、鉢の縁には触りません。このスリップウェアの作り方が父のやり方と同じかどうかは分かりませんが、これが今のわたしの

作り方です。作り始めると色々アイ

ディアが浮かんできて気分がのつてきます。だいたい四十枚ぐらい作ると手の調子がよくなるのですが、他の仕事もする都合上、五十枚ぐらい続けるのが限度です。それでなんとなく物足りなく思ってしまうのが悩みですが、今、スリップの仕事にとっても喜びを感じて

います。

父の作品集の出版でお世話になったことがご縁となり、たくさんの方々と知り合うことができました。その後も何かとお世話になり、今の自分があると思つています。また、父・晴二郎と一緒に仕事をしたことはありませんが、父がわたしに暮らしの中で伝えてくれ

た物が何なのかを捜しながら、今、仕事を続けています。

この度、銀座たくみの皆様のお力添えにより第二回作品展開催の機会をいただきました。今のわたしの仕事をたくさんの皆様にご高覧いただければいいつそうの喜びでございます。

武内真木さんの仕事

志賀直邦

昨年秋、大阪日本民藝館から「英国のスリップウェア」が刊行された。スリップウェアは軟陶の皿や鉢を中心に、主にオーブンに入れてパイなどを調理した陶器である。イギリスの近世から

十九世紀にかけて、庶民の家庭で広く使われたものであったらしい。

日本でこのやきものの魅力を最初に発見したのは濱田庄司とバーナード・

リーチであった。そのいきさつについては雑誌「民藝」の本年二月号に載つた濱田の旧稿「英国の軟陶」が詳しいのでご覧いただきたい。

スリップウェアはイギリスで生まれ恐らくはその国の料理や暮らしと不可分のものとして広まったのだと思う。

ヨーロッパの他の国やアメリカ、中米にも伝わったが、その美しさと格調に

おいて英国の品にかなうものはない。そのスリップウェアの美を認め愛好することでは日本人が一番だという。

私の畏友安東伸介さんも、その美しさの魅力に取りつかれた一人であった。安東さんは、柳宗悦先生の親しい友人であった慶応大学教授の吉田小五郎先生に可愛がられた。なによりも美への直観力と民藝への理解において並々ならぬものがあつたからであらう。

お二人とも蒐集集のものを語るのに尽きぬ喜びをもつたというが、安東さんは愛蔵のスリップウェアの大皿を吉田



スリップウェア 直径 15 cm

先生にお見せできなかった心残りを、よく語っておられた。

その安東さんが平成十一年の晩秋、武内真木さんの父君晴二郎氏の作品集出版の予告を見てたくみに来られたのであった。そしてこの出版を記念して

の特別展のあることを知り、大鉢の購入を予約された。もとよりこのときは抽選であったから不確定であったが、彼はその後本展までの間、多忙にもかかわらず何回立ち寄られたことか。

その年七月、私は安東さんから昭和五年四月刊の「英国の工藝」（石丸重治編）の寄贈を受けたのである。この本は吉田先生から頂戴したといわれ、安東さんは『民藝』の思い出のために」という献辞を添えて下さった。

「英国の工藝」は、大正九年（一九二〇）リーチと共に渡英しセントアイブスで作陶に励んだ濱田庄司が、滞英中に蒐めた十七世紀から二十世紀初頭にいたる、英国の工藝全般にわたる図集である。家具四十二点、スリップウェア十七点から金工、ガラス、織物、古楽譜まで総数一二四点、いずれもわが国に初めて将来されたものばかりであった。

安東さんは武内晴二郎作の大鉢を手

に入れたことを喜び、子息の真木さんの成長を愉しみにしておられた。そして平成十三年九月のたくみでの真木さんの個展のあと、1年余りのち冥界に旅立たれたのであった。氏は慶大名誉教授、英文学が専門であったが、民藝を家族との生活の中で心から愉しみ、しかも絶えずその原点を模索しておられた。

いま武内真木さんの作陶展を前に、亡き安東さんを思い、そして寡黙な作家であった父君晴二郎氏の、あの生命感の漲る多彩な作品の数々を思い起こすのである。

今回真木さんは、スリップウェアの手法を主に試みたという。真木さんの作は軟陶ではないが、それだけに現代のスリップウェアとして多くの方たちに親しんでいただけるとおもう。

武内真木さんの仕事をとおして、陶芸の仕事の魅力を存分に味わっていただきたい。

吉田璋也先生と凍羊肉火鍋

瀧田 項一

民藝運動の黎明期に山陰地方の数々の手仕事に息を吹き掛けて、新作工芸品を産み出し育て上げた吉田先生の功績は、既に世に広く知るところであるが。

意外と知らぬことが、璋也先生と「凍羊肉火鍋」との関わりあいのことである。

それは太平洋戦争も終結して、世の中が混沌たる時期も漸く落ち着きを取り戻したような昭和三十年の頃だったろうか。

京都の十二段家の西垣さんが鳥取の吉田先生を尋ねて、これから如何なる料理をやるべきかと、料理にも精通している璋也先生に今後の店の指針をも伺ったのである。

なにしろ、璋也先生軍医として北支に長い間従軍中に数々の中国北部の生活用具を見出して、当時(昭十四、五年)の「月刊民藝」誌上に照会し、北支那の新作民藝品を指導したり、将又北支の数多くの料理にも詳しい人であった。先生即座に「凍羊肉火鍋」と称う北支地方に伝わる料理がある、是非これを薦めたい。

中国では羊肉を最高の肉として用いるが、京都ならば名高き神戸牛が在るではないか、それと置き換えればよいし、火鍋なる鍋の良いのが北支から持ち帰ったのが私のところに在る、これを安来で作らせれば良いのが出来る。

——と云うことで話が進み西垣氏膝を叩いて即決となる。早速に十二段家で

「牛肉水たき」として火蓋を切ったのである。

みごとに和風火鍋として大いに人気上昇、ところが、世の中には素早く小賢しいご仁が居るもので、いつの間にか「しゃぶしゃぶ」なる料理名を商品登録して了ったのである。

トンビに油揚げの譬えの如く「しゃぶしゃぶ」の名称は矢鱈に使えなくなつて了つたと聞く。

吉田璋也先生が日本で再現したシャブシャブもその起源のほどを識る人も少なく、今や日本中津々浦々に「しゃぶしゃぶ」の名は広まり、そのバリエーションが種々とうまれ、スキヤキ鍋は影をうすめた感さえする昨今である。

民藝の世界に残した吉田璋也の足跡は意外なところにも花を咲かせているのである。

(日本民藝協合理事)

たくみとの五十年

笠間達男

『月刊民藝』（第一卷九号 昭和十四年十二月号）は「たくみ特集」である。私がこれを古書店で手に入れたのは、『民藝』を購読するようになった昭和三十年以降である。



南部鉄器の角すき焼鍋

この特集に日本民藝協会の「棟方志功近作版畫『釈迦十大弟子十二枚』頒布」の広告が載っている。これは、昭和三十年のサンパウロ・ピエナール国際美術展で最高賞を受け、翌年のベニスビエンナーレにも出品され、棟方を国際的作家にした作品である。頒価は一枚二十円、大揃二百円となっている。小学校教員の初任給四五円、校長百三十円の時代だから、当時一二歳だった私がたとえ教師になっていたとしても買えなかっただろう。

我が家では今夜はすき焼きだという、結婚して四八年になるが、すき焼き鍋は、独身時代からの南部鉄の角鍋である。この鍋は当時の「たくみ」の売れ筋の商品だったという。これは「たく

み頒布会」で手に入れた。この毎月の会費は五百円だったが、大学卒の初任給が一万二千円の時代のアルバイト学生にとっては頒布会に入るには決心が必要だった。棟方の版画、芹澤のカレンダー、浜田の湯飲みなどが届けられ、私は独身の間はこの湯飲みを日常使っていた。

今は亡き友人の今城甚造（武蔵野美大教授）は、民藝紹介を中心に『ふるさとの美術』（昭和三十一年、東西文明社刊）を著して、その一部が三六年から中学校教科書『新中学国語一』（大修館）に収録された。当時二六歳の今城は東京教育大学芸術学科を卒業したで、高校の時間講師をしていた。

二歳年上の私はまだ大学院生で、前年に『日本の学問をおこした人々』を刊行して収入を得たので、今城に民藝品を買う費用を稼ごうとそそのかしてあの本を執筆させたのであるが、凝り性の彼は『柳宗悦選集』（全十巻、春秋



松本家具の違い棚

玄関の益子焼きの傘立ては、
独身時代に「たくみ」で買った
手あぶり火鉢を一時金魚鉢にも

したものである。傘立てといえは、昭和四四年の高校紛争時代に訪れた日比谷高校の校長室の二つの傘立てがどれも浜田庄司の大壺だったことに驚いたことがあった。

民藝に関心を持つて五十年も経つと、器物は増えたが、買求めたのは職人の手になる日用品が中心で、我が家には『お宝鑑定団』に出すような骨董品はない。

数年前にリフォームしたとき、民藝品がうまく納まるように配慮した。自己満足するまではいかなかったが、折々の思い出の品を取り出して愉しんでいる。

喜寿を迎えて銀座への足は遠のきがちだが、これからも画廊巡りなどの合間に「たくみ」を訪れることを続けていきたいと思つている。

（東京民藝協会会員）

社刊）を購入するなど資料を集め、出費は原稿料を上回ったという。その『柳宗悦選集』は、いま今城の形見として私の書架にある。

結婚したとき妻の友人たちは柳宗悦デザインの紅茶カップ、洋皿とトレイを贈ってくれた。壊れたカップや皿は買い足してきた。

私が新居を得たとき、最初に買った

のは松本民芸家具の座卓で、これです事もし、原稿を書き今も使つている。小津安二郎映画の小道具にも使われた鳥取の電気スタンドは奈良日吉館から譲り受けた二月堂の上に置いてある。ロッキングチェアやライティングデスク、椅子、戸棚、飾り棚なども何年かかけて、主に「たくみ」で買求め数十年使つている。

芹澤デザインの団扇を子ども

たちが何本壊しただろうか。益子をはじめ、全国の民藝窯の器も、ずいぶん壊したがだんだん増えた。壊れないこけしは知らない間にたまった。旅先で買う伝統玩具も大部分は飾りきれないで押入に眠つていて、毎年、お目にかかるのは干支の動物玩具と各種の雛人形だけである。



文化の反逆「上方のはなし」近松門左工門



文化の反逆「春光うららかに」

芹沢銈介の物語絵について（四）

志賀直邦

『文化の反逆』

「極楽から来た」の挿絵の好評によつて、芹沢銈介はこのあと引きつづいて新聞小説の挿絵の仕事を引き受け

ることとなる。その手はじめは同じく佐藤春夫の小説「文化の反逆」であった。この小説は週刊芸生新聞に昭和三十八年四月八日から翌年五月二十五日まで、およそ一年余りの間連載された

のだが、小説としてはさほど評判にならなかったようだ。

それは世間的に知られていない週刊新聞の連載ということもあったが、主人公がこれも余り知られない馬場文耕という物書きであったことにもよろう。

文耕は伊予の下級武士という。時の綱吉と柳沢吉保の政治を批判し武士を捨て江戸に出る。初代団十郎の知己を得、曲折を経て講釈師となり、自分の目で見えた諸大名や幕府の政事（まうりごと）を批判し、あげく創造力を働かして、根も葉もある嘘八百の物語「日光郡鄂枕（あかぬきまくら）」を書き上げるのであった。

結局、文耕の反逆はお上の知るところとなり、奉行所に連行され極刑に処せられるのだが、綱吉や吉保だけでなく井伊大老や平賀源内も登場しての文脈の飛躍は、いまひとつ人気を呼ばなかったようだ。

しかし五十九図に及ぶ芹沢の挿絵は、江戸時代前期の風物を活写して倦むと



十三妹「首のはなし」



十三妹「十三妹と白玉堂」



十三妹「お祭さわぎ」

ころがない。古絵巻、古版本を渉獵しながらも芹沢ならではの独創の作であり、作品としても稀少の価値がある。この「文化の反逆」挿絵集は、昭和四十二年（一九六七）七月、五十九句型絵染、表紙強制紙黄土染、和綴本にて、限定十部が吾八から刊行された。

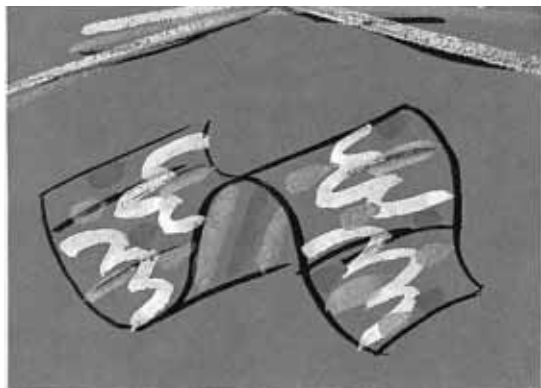
中国忍者伝『十二妹』

芹沢銈介が次に手がけた挿絵は、武田泰淳原作による小説「十三妹」である。この作品は昭和四十年七月から十二月末にかけて朝日新聞朝刊に連載されたのであった。この年芹沢は七十歳、もつとも円熟しきった時であった。

この小説は、武田によれば中国清時

代の小説「児女英雄伝」の主人公十三妹に、「三侠五義」の人気男白玉堂を組み合わせることで創作したもので、中国の物語そのままではない、という。

「人が人を殺すとは、まことにむごたらしい話である。まして、人の生首を切り取るなどは……」という書き出しの「首の話」を第一回に話はすすむのだが、安家の若旦那安公子の第二夫



津村の小絵馬「染物」

人、またの名十三妹は、かつて勇名を
とどろかせた女忍者であった。

話は「旅の話」「ねずみの話」そして科挙といわれる受験の話など織り交ぜながら、盗賊やさまざまな危機から夫を救い、最後に姿を消すのである。

芹沢は挿絵集刊行に際して次のように記している。「十三妹は、私の三度

目の、新聞挿絵です。打ち合わせの時の、武田さんの中国譚が誠に面白くて、聞くままにいつか、私の脳裡にかの中国影戯の美女、豪傑、怪物等が群り出没しているのです。」

芹沢がいかにこの「十三妹」挿絵の仕事を楽しんだか、昭和五十一年（一九七八）十一月から翌年二月にかけてフランスのパリ、グランパレ美術館で開かれた「芹沢銈介巴里展」に、この「十三妹」のシリーズが額装されて十葉余り展示されたことをみてもよく理解される。

中国忍者伝「十三妹」挿絵集は、昭和四十三年一月、一四五図、型絵染筆彩、表紙絹布模様染、和装仕立、限定十五部が吾八から刊行された。他に四十二年三月には、芹沢自選による五十葉を台紙貼りした箱入画集も刊行されている。

『津村の小絵馬』

芹沢銈介は昭和四十六年一月に出した私刊本「腰越浜歩き」に、「十余年仕事の巢なりし腰越津むらの草庵は、去秋こぼたれて灰となった。腰越の浜もなつかしい」と書いた。

「津村の小絵馬」はその頃、来客のために作った手すさびの小物、と芹沢は語る。墨版だけをシルクスクリーンで刷り上げ、色は筆彩したものの。一図一図独立したモチーフだから物語絵ともいえないのだが、芹沢自身のなかでは鎌倉津村小庵での暮しの想いが一貫しているのか、自ら物語絵に分類している。この小絵馬集は、昭和四十八年八月、四十図、和綴本畳紙入、限定二百部で吾八より刊行された。

『妙好人因幡の源佐』

この作品は、源佐五十年忌讃仰大法要に当り、鳥取の高林山願正寺の発願



妙好人因幡の源佐「ようこそ ようこそ」

により制作されたもの。妙好人みょうこうにんとは浄土真宗の在家の信者で、とくに信仰心の篤い人をそう呼んだ。

物種吉兵衛や浅原才市など知られるが、これは柳宗悦、市笠一省編の「妙好人因幡の源佐」語録二九八章の内から選んで制作されたものである。

全二十六章、いずれも私心なく、他

人を思いやる心にあふれ、人に尽くす喜びの言葉である。扉絵の「ようこそ、ようこそ」は、芹沢による「のれん絵」としても人気を博した。

「妙好人因幡の源佐」は、昭和五十五年(一九八〇)七月、二十六図、型絵染和綴本、漆塗り合わせ函入、蔵版高山山願正寺、限定五十部が刊行された。

他に、やはり願正寺発願による二百部本(東峰書房制作)や、試作本十部がある。

以上に芹沢銈介による物語絵の代表作と思われる諸作品について述べた。これらの作品の総数はおよそ八百図にも及ぼうか。そして六十年に余る芹沢の制作活動のなかでも、とくに根幹をなす部分のひとつである。まさに芹沢芸術の真髄をなすといつても過言ではない。それとともにいま、芹沢につづく物語絵の、新たな作者が出現することを切に期待したい。(完)

あとがき

今号の執筆者瀧田頂一、笠間達男の両先生の文章にある「しゃぶしゃぶ鍋」や鳥取や松本の民藝家具の話は、いずれも昭和三十年から四十年代の、新作民藝運動がもつとも活き活きとして、多くの愛好者にとつて強い憧れでもあった時代のことである。

物の乏しい時代ほど、その時代にふさわしい新しい生命を生むのかもしれない。柳悦孝先生はかつてこういわれたことがある。「戦後の沖繩で、庶民の暮しの必要から真先に甦った壺屋の焼物こそ本当の民藝品といえるだろう。」瀧田先生は陶藝家、笠間先生は都立の高校長を歴任された方、いずれも含蓄のある文章のなかに民藝への深い愛情がうかがえるのである。(S)

発行 株式会社たくみ

東京都中央区銀座八一四―二
発行責任者 志賀直邦

電話 〇三―三五七―二〇一七
FAX 〇三―三五七―二一六九
振替 〇〇―一〇二―三五六五九
定価 六〇円(税込)